

薬師寺東塔擦銘の研究

— 刻書前半部とその背景について —

研究員 廣瀬裕之、
漆原徹、遠藤祐介
薬師寺・東塔擦銘前にて(2022年)▶

本論考は、武蔵野大学「しあわせ研究費」採択による上記3人の共同研究の成果発表であり、第6回目の研究論文である。「中国仏教の日本への受容」というテーマで調査を継続し書道学・歴史学・仏教学から考察を加えてきた。2017・2018・2019年度は薬師寺の国宝「佛足石」の調査研究を3年間、2020・2021年度は、国宝「佛足跡歌碑」の研究を着手、コロナ禍のため、現地での調査研究が危ぶまれたが時期を検討して訪問、この研究は2年間継続。これらの成果は『武蔵野教育学論集』第4・6・8・10・12号に研究論文として発表してきた。本年度(2022)からは、国宝東塔に刻された「東塔擦銘」を拓本と原刻および写真による照合調査から書線の確認・検討を行い、今年度は刻書前半部の書としての正確な復元とその背景の研究をして論文にすることができた。お蔭様で薬師寺における奈良時代の書刻の調査を開始して6年目となる。今回、調査研究のため薬師寺を訪れると大変貴重な同寺蔵「東塔擦銘」の原拓(軸装)を見せて頂けた。擦銘は東塔の高い屋根の頂部にあり、修理等で足場を組んで取り外した時など、よほどのことが無いと見ることができない位置にある。よって採拓の難しさは尚更である。この拓本の採択時期は不詳とのことであったが、概ね特定することができた。同時に美術

的価値の非常に高い「水煙」も今回の大修理において、地上に降ろし堂内に収蔵。昨年引き続き間近で拝見させて頂け、感激と感謝の気持ちで一杯であった。修理完成後これら原物は、東塔頂部に戻さず、堂内陳列室にて保存することになったという。よってその代わり、現代の粋を集めて同じ金属で全く同寸に制作されたレプリカを設置したという。私たちの研究論文をよくお読み頂いておられるとのことで、今回も薬師寺の応接室でいろいろな意見交換ができたことが喜びであった。刻面調査だけではなく、写真撮影も許可して頂いたご厚意に深く感謝したい。古代の薬師寺佛足石以外の佛足石については、従来近世以降のものしか存在しないという理解が一般的であり、私たちはその間の時代、つまり近世になる前(中世)の佛足石探しも大きな研究テーマの一つとして引き続き進めてきたが、今回も京都・奈良を探訪した結果、中世のものとは推定できる新たな佛足石の存在を発見することができた。

前回までの研究で、京都法然院、安土城、銀閣寺、清水寺など、今回は新たに有名な法隆寺や浄瑠璃寺などにも存在することが判り、寺院の人さえ知らない中世もしくはそれ以前の可能性を持つ佛足石であることが判明したことが今回の調査探訪の大きな成果であった。私たちの共同研究は従来の研究を着実に前進させているといえよう。本成果は、『武蔵野教育学論集』第14号(2023年3月刊行・武蔵野大学教育学研究所発行)に掲載した。今後も仏教を中心とした文化の研究を更に推し進めていく所存である。